

# 面

山本鬼之介句集

マネキン

114

山本鬼之介句集

マ  
ネ  
キ  
ン



マネキン

〈昭和四十六年〜五十年〉

三月や波浮の港の避雷針  
選りすぐる石で春濤づたづたに  
春の野や女をすてて掛矢振る  
漣や明治の父の磯あそび  
山ざくら屋根師は遠き東より  
銀輪の光も鈍し走り梅雨  
六月の足に精虫棲むごとし  
土を這ふ昼の蝙蝠つつがなく

# なんだかかんだか

池田澄子

春や世々羊水あたたかく満つる  
二礼二拍手一礼初蝶が目の端  
絶対動かぬゴールデンレトリバー飛花落花  
ほととぎす啼くたびいのち泡立つか  
裏富士の裏から月や蝸牛  
子子の未来 v s 姉の過去  
黒揚羽来て去り彼我の目が合いぬ  
セシウムだかなんだかかんだかあれば百舌  
汐しぐれ老いて目病みの鯉その他  
いつから此処に居たんだっけか夕枯野

# 寒 卯

竹 内 弘 子

物故と言ひ故人と言へる寒卯  
飼犬の骨を埋めし柿若葉  
池の端の櫛屋をのぞく春の宵  
煮魚の小骨を舐り春深し  
煙草火の点々とゆく苗代寒  
西馬込街道すぢの種物屋  
春暁や黙示のごとき地震に覚め  
火宅僧バケツの諸子のぞきをり  
墜ちながら天日昏むいかのぼり  
回送電車涼しげに通過せり

# 自画像

遠山陽子

冷まじや地下大本營に奥の部屋  
うなそこは吹雪なるべしおほやしま  
体内に引潮ありて寒桜  
雪の匂ひひして自画像は七本指  
われ在りて寒月光を身にまどふ  
立春や切口見つつ肉を食ふ  
白雲にぶつかるとき鶴若し  
黙読の舌のうごいて浅き春  
ラムネ壘のくびれ故郷は新宿区  
銀座あんみつ昭和言葉の母たちよ

# 試 作

高 橋 龍

銑 鍾 脹 勺 常用漢字表から除外

銑 鉄 は 井 桁 に 積 ま れ 春 の 雪  
春 眠 の 深 き に 垂 ら す 鍾 かな  
脹 み て な ほ 包 茎 の チ ュ ー リ ッ プ  
春 陰 に 刃 を 刻 む 竿 秤  
春 深 く 配 給 二 合 三 勺 に  
頭 頭の中で白い夏野となつてゐる窓秋 の 中 が 白 い 夏 野 に な つ て ゐ る  
頭 の 中 は 白 い 夏 野 で な つ て ゐ る  
頭 の 中 で 白 い 夏 野 は な つ て ゐ る  
頭 の 中 に 白 い 夏 野 と な つ て ゐ る  
頭 の 中 と 白 い 夏 野 が な つ て ゐ る